

早稲田大学インクルーシブ教育学会 ニュースレター

2023年（令和5年度）・NO.1

2023年度 総会 本田恵子会長挨拶

インクルーシブ教育に関する現場の受け止め方にも少しずつ変化し始め、インクルーシブが進み始めているように感じます。そのような中で、学校生活の大半を占めている授業ではどのような工夫が求められるのでしょうか。

本日の記念講演では、皆さんに最先端のUDLについてお届けします。現場に根付いていける充実した学びの機会にしていきたいと思います。

記念講演 UDLの最新情報 アメリカの教育現場を反映して

NY州スクールサイコロジストのバーンズ亀山静子氏を講師にお招きし、最先端のUDLについてお話いただきました。

UDL-IRN (THE UDL IMPLEMENTATION AND RESEARCH NETWORK) の大会

今年で10年目の開催となるUDL-IRNの大会。バーンズ先生は2回目の開催から参加されています。この大会では世界中の実践者と研究者が集まってディスカッションをしたり、ネットワークを作ったりします。4年ぶりの対面開催となる本大会では、「感情の理解と学び」「公正さとUDL」「キャリアに結びつくUDL」、また、探究学習やPBLとの関わりの中で捉える「UDLと親和性のある学習方法」について、先生たちを支えるための「コーチングシステムの構築」など、多様なトピックが扱われていたようです。また、コロナ前に開発中だった「資格制度」についても報告がありました。

日本のUDLについてプレゼン！

バーンズ先生をはじめ、ルーイ・ロード・ネルソン先生、川俣智路先生は、日本のUDLについてプレゼンテーションを行ったそうです。日本では、先生1人に対する生徒の比率の多いこと、コロナ禍でテクノロジーの使用が増加したこと、教員の研修時間が少ないことなどについて報告をされました。特に研修制度については、アメリカと日本の違いに驚きの声が上がったそうです。今日の研修会もそうですが、学校の公費で平日に研修を受けることが通例となっているアメリカに対して、日本の先生たちは休日を返上して自費で研修を受けていることが多いです。日本の現状について知っていただく良い機会になったようでした。

パネルディスカッションに参加

またこの日、バーンズ先生は10年を振り返るパネルディスカッションにも参加されました。そこでは、UDLが今後どうなっていくのかについて考えると同時に、話題は「この10年間で何が増えたか？」という方向にも向かいました。その点についてバーンズ先生より、四つの観点で説明していただきました。一つ目は「先生たちのサポート」、二つ目は「ほかのイニシアチブとのつながり」、三つ目は「ガイドラインの改訂」、四つ目は「資格認定制度」です。

「ほかのイニシアチブとのつながり」の中では、印象に残るお話がありました。LDやADHDの団体であるNational Center for Learning Disabilitiesのサイトに、「そもそも評価はUDLに沿った方法でやらなければいけない」という記述があったとのこと。つまり、専門の団体もまた、UDLが実践されることでLDやADHDの子どもたちが学習しやすくなるを理解しているということです。UDLの考え方が日常に溶け込むことがいかに重要か実感したお話でした。

さて、ここで、様々な発表を見たバーンズ先生が心のうちを披露してくださいました。それは、「実践でも研究でもサポート体制づくりでも、ゴールが重要！」ということです。ゴールが明確であればプレずに本質を追求していける、バーンズ先生はそうおっしゃいます。はい、まさにその通りです！

「あなたは今どのような段階にいますか？」アンケート

バーンズ先生より参加者の皆さんに向けて「UDL の実践で皆さんはどのような段階にいますか？」という問いかけがありました。



回答結果は以下になりました。(参加者 51 名)

1) 懐疑的 0%	2) 少しは希望を感じる 9%	3) 探索中 62%	4) 初級 20%
5) かなり熟達 9%	6) エキスパートに近づく 0%		

回答結果からも分かるように、現在は徐々に UDL を実践する先生が増えてきています。そこで重要なのが、上記の 2)～4) の伴走。このワークを考案した Pusateri 先生はそうおっしゃいます。そして、ここに集まった方々には、ぜひ 2)～4) の人たちの伴走者になってほしいとバーンズ先生は加えました。では、どのようにしてマインドセットをしたら良いのでしょうか。ハウツーも大事ですが、マインドセットに変化があってこそツールといえます。そこで、この後 10 分ほど 2)～5) のグループに分かれて、「どんなサポートが必要か?」「どんなサポートができるか?」という観点で対話をしました。以下、それぞれのグループで出された内容の抜粋です。UDI 実践者として高度になればなるほど具体的な内容について話されていたようです。

少しは希望を感じる	探索中
<どんなサポートが必要か> ・実践例を知る機会 ・学校組織としてどうしたらよいかの例 <どんなサポートができるか> ・デザイン思考のワークショップ ・講演会の企画	<どんなサポートが必要か> ・一緒に考えてくれる人の存在 ・実践した後のフィードバック <どんなサポートができるか> ・研修会で学んだことを同僚に伝える ・授業の中で実践したことを同僚に報告する
初級	かなり熟達
<どんなサポートが必要か> ・実践の内容があっているかの確認 ・ICT の活用事例 <どんなサポートができるか> ・子供の足場かけの実践例の提示、UDL とは何か? の研修 ・マインドセットへの介入	<どんなサポートが必要か> ・他のテーマで取り組んでいる人たちとのすり合わせ ・UDL 実践者としての指標 ・どんな子どもにどんなものを提供できるかのリソース集 <どんなサポートができるか> ・対話によるモチベーション維持、修正、アイデアの共有

まずは、教え方の見直しをするところからスタートします。そして、先生が手本を見せながら相互に信頼し合えるコミュニティをつくり、学習者自身に任せることが大切です。さらに、すべての生徒のニーズに応えようという先生の気持ちの備えができていることが UDL の効果へつながる鍵となるのです。バーンズ先生より前向きな言葉をいただき背中を押されて会が閉められました。

----- ご参加の皆さまからの感想 -----

- ・大変勉強になりました。授業実践では迷いしないような状態で、先生方とその共有ができたことも励みになりました。セルフアセスメントができた気がします。ありがとうございました。
- ・最新の UDL 事情から始まり、自分の立ち位置を正しく知り、これからどうありたいかを考えるというお話は、この時期にじっくり考えたい、同じ関心をもつ方々と共有したい内容でした。ゴールを掲げて、来週からの実践を楽しんでいきます。
- ・UDL に関して「自分はどの段階にいるのか」を考え、さらに「自分にはどんなサポートが必要なのか」「どんなサポートを他の段階の先生に提供できるか」についてブレイクアウトルームで話し合うという機会を得て、主体的に学んだという実感がわきました。